幼児とその母親

関　治子

幼児と生活を共にしている私共にとって、一人ひとりの幼児の個性を捉えて、その個性に適合した教育をしていきたいという気持があると思います。同年令の幼児の集団生活の場であれば、片寄ることのない心身の円満な発達を目的とすることは言うまでもありませんが、一人ひとりをよく見つめていきたいと痛感致します。それは、余りに一人ひとりの個性が違うからで、今までに接した幼児たちでも、同系統ではあっても、同一の個性の持主はまずありませんでした。

ある一つの事を注意するとします。A君には、よく理由を納得するように言います。B君には、はっきりと卒直に注意します。C君には、自分で判断するように仕向けます。このように、それぞれの幼児に対して、私は、多少ニュアンスを異にして相対しているようです。

幼児をよく知るためには、家庭の環境をある程度は捉えることが必要です。よく知ることは必要ですが、場合によっては、家庭の事情を余り深く知ってしまって、却ってその幼児の教育のために、偏見や先入感を持ってしまっても危険です。そこで、私は、ある程度ということばを使いました。

私共の園では、毎日送り迎えをしている関係もあって、幼児の母親と接触することが多くなっています。母親に対する態度――これが私にはむつかしいことでした。幼児だけに対していれば、こんな神経は使わなくてもよいのにと思うこともありましたし、母親に接してみて、あらためて　その幼児を違う角度から眺められたこともありました。ここに、少し実例を挙げてみたいと思います。

幼児とその母親を、保育者としての私からみた場合です。

（その一）

A夫は、入園当初、興奮状態にありました。キィーと高い声をはりあげて、部屋を走りまわったり、友だちの肩に歯型をつけてしまったりして、私にとっては、一時も眼の離せない幼児でした。しかし、ふしぎなことに、非常に注意は要するが、この集団生活に喜びをもっているようすをみて、何とか集団生活にうまくはいれるようになれば、問題点もだんだん解決されるのではないかという見通しが持てました。しばらくたってから、母親がよ

うすを聞きにこられました。母親は、自分の子どもを問題児にしています。そして、近所の方からもそのように言われ認められています。問題児として眺めると、問題のある結果ばかりを真剣に考えてしまって、その年令の心身の発達状態を考えてみることを忘れているのです。この場合は、何か母親に大きな原因があるように感じました。私としては、危険を伴うことや、明らかに他の幼児に悪い影響を与えると思われることには、はっきりと対処しますが、殊更に特別児扱いにはしないことを母親に申しました。この幼児には、普通に話の通じる相手が一番必要のように思いました。今、一年半経ちましたが、社会性がいくらか低いようですが、問題のある行為はずっと少なくなったと思います。母親は、まだまだ、問題児を持つ母親のようなようすがとれていません。

（その二）

B子は、小柄で、特別に目立つ子どもではありません。家庭で、誰かの力によって、とても、きちんとしつけなくてはならないと思われている　と私には感じられました。第一に、とても頻繁に御手洗にいきます。その度に「先生、御手洗にいってもいいですか。」と聞きにきます。子ども同志では、普通にあそんでいます。萎縮しているわけでもなく素直ではありますが、自分の赤裸々な姿を出し切っているようには見えませんでした。その母親は、やや年配の方ですが、素朴そうな感じでした。話してみて、私は面喰ってしまいました。B子のことを私に対して話すのに、全て敬語なのです。さぞその母親としては緊張しての結果であろうと解釈しました。しかし、次の時にも「B子ちゃん、今日頭が痛いとおっしゃるのですが、お熱もおありになりませんし……。」どうにも　首を傾けずにはいられません。この母親にはこの敬語のあやまった使い方を、どうして知らせたらよいのでしょう。私はこの母親と話す度に悩んでしまいます。家庭の中に誰か　このB子をきちんとしつけて、B子を家中の宝のように大事にしているのでしょうか。母親に伺ったことから察して、B子の祖母がB子と相手になってあそんでおられるとのことですが、そんなに下にも置けない程ではないと思いました。母親が、幼稚園やその教師に対して極度に緊張しているからなのでしょうか。母親に対しても緊張を和らげてあげたいそんな気持で接しています。

（その三）

C夫は、とてもはにかみ屋です。日常のあそびは元気に溢れ、活発でもあり、子どもらしさがあります。しかし、これが対教師や、対おとなの関係になると、如何にも子どもらしくはあるのですが、どうにも恥ずかしくて、まともにおとなの顔がみられないのです。何か言いたいことがある時や、質問を受けた時には、下か横を向いて早口に答えます。C夫の母親と話した時に、C夫のこの態度について、うなずけました。この母親は、私と話すことが、とてもたいへんなことらしく、話していて、顔が痙れんしています。性格的なことは、その幼児ひとりだけでなく、

大いに先天的なことを感じました。こういう性格は、とても急に直すことは出来ないと思います。言うべき時には、言えるようにするために、これこそ、集団生活の場が、何よりの環境だと思います。劇あそびの折に、主役になりました。何人も希望者があったのですが、くじでC夫に決ったのです。いざ決ってみると、C夫は　嬉しいような当惑したような気持だったようです。C夫の主役は、必ずしも成功だったとは言えません。せりふが、早口で小声で聞きとり憎く、劇あそびの進行上、私としては悩みの種でした。しかし、C夫が、はにかみつつも、この役を嫌がらずに、張り切っていたようすをみて、やはり、こういう場を通っていくことによって、自然の形で、得られるものがあるという気がするのです。こういうC夫の将来はどうなるのでしょう。こういう性質を持ちつつ、どういう成長をたどるか楽しみです。

（その四）

D郎は、男児としてはおとなしいタイプです。入園当初は、キィー、キィーという声をはりあげて、走り廻るので、これは、相当かきまわされるという気がしていたのです。しかし、これはほんの一時的な現象でした。気が小さくて、私の傍に来て、ボソボソと、それも幼児語で、やっと話します。そんな調子で一年を経過しました。自立心を養うためにも、集団生活のためにも、自然な発達状態からも、幼児の自覚からも、朝の挨拶や仕事は全部幼児自身がしておりますが、このD郎の母親は、D郎が出来るにも拘らず、必ず、世話をしたがります。この点は、注意をしましたが、母親は挨拶のために必ずこられます。D郎が朝の挨拶を、はっきり言わずに口の中でボソボソと言うのですが、何とか　挨拶からでもはっきり言うように向けたいと思っておりました。母親が、止むを得ない事情のために、D郎をおいて、四、五日家をあけることになりました。その間、D郎は、朝も、かけるようにとびこんできて、大きな声で「お早うございます。」というではありませんか。私も驚きと共に、たいへん嬉しく思いました。母親が帰ってきて、とても心配そうに私に聞かれました。「私の留守中、如何でしたでしょう。もう、私、心配で心配でたまりませんでした。D郎の方が、お母ちゃま、僕、ひとりでちゃんとお留守番してあげるから大丈夫、行っていらっしゃいよと言ってくれた程です。変ったようすはなかったでしょうか。」それに対して大いに変ったようすをお話ししました。これは、母親の方が、いつまでもD郎を自分から切り離して考えられないのでしょう。D郎の母親も、これがよい体験となり、はっきり御自分の子どもに対する態度がわかって下さったことと思います。

以上、少数の例に過ぎませんが、それぞれの幼児に、いろいろな母親の態度を感じます。園での教育方針と、家庭での方針に、余り開きが激しいことは望ましくありません。幼児とその母親をよく知ることによって、保育者である私は、随分、考えさせられると痛感しております。

＊　＊　＊